

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20401036

研究課題名(和文) 地中海東岸地域における都市の形成と展開

研究課題名(英文) The formation and development of cities in the eastern Mediterranean Area

研究代表者

桑原 久男 (KUWABARA HISAO)

天理大学・文学部・教授

研究者番号：00234633

研究成果の概要(和文)：

本研究では、イスラエル、下ガリラヤに所在するテル・レヘシュ遺跡の発掘調査を 3 シーズンにわたって遂行し、前期青銅器時代の建築遺構(東斜面)、中期青銅器時代の壮大な城壁の一部(テル頂部西端)、初期鉄器時代のオイル・プレス(テルの各所)やカルト・スタンド、土製仮面などの宗教的遺物(テル下段北側)、鉄器時代の要塞建築(テル頂部)、ローマ時代の「ファームハウス」など、居住の歴史と様相に関する貴重な所見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：

In this study, three seasons of excavation at Ter Rekhesh, located on Lower Galilee, were conducted and the unexcavated remains as follows shed new light on the history of settlement: Architectural remains of the Early Bronze Age(the eastern slope), a segment of a large wall of the middle bronze age(western edge of the site), oil press installations of the early iron age(all over the tell), cultic objects such as cult stands and a clay mask of the same period, massive enclosure of iron age(7-6 century). Roman 'Farm House' (top of the site) and so on.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2008年度 | 3,900,000 | 1,170,000 | 5,070,000 |
| 2009年度 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |
| 2010年度 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |
| 2011年度 | 2,000,000 | 600,000 | 2,600,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 12,700,000 | 3,810,000 | 16,510,000 |

研究分野：人文学 A

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：地中海、イスラエル、都市、青銅器時代、鉄器時代、テル・レヘシュ

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者・分担者は、1990 年以降、イスラエル北部に所在するエン・ゲヴ遺跡の発掘調査に従事し、鉄器時代(紀元前 10 世紀～8 世紀)からヘレニズム時代(紀元前 5～4 世紀頃)にわたる同遺跡の建築遺構や出土遺物の研究をおこなってきた。2004 年 8 月、

エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が終息し、同地域における日本人による調査研究を継続・発展させ、かつ、都市の形成と発達の過程を青銅器時代へと遡って追求するために、新たな発掘調査について模索を行った結果、下ガリラヤに所在する本格的なテル型遺跡であるテル・レヘシュが、採集資料から重要性が窺え

るものの、これまで未発掘であること、各方面から発掘調査が期待されていることを知った。

現地との協議や予備調査をおこなったところ、本格的な発掘調査が可能であり、同遺跡の発掘調査を軸にした考古学的な調査研究を行うことで、同地域の都市の形成と発達の過程、あるいは他地域との政治的関係や文化的交流の足跡について、遺構・遺物を通して具体的に解明することができると思えるに至り、各方面の支援と理解を得て、2006年3月、発掘調査を開始した。

2. 研究の目的

(1) 全体的目的

テル・レヘシュは、前期青銅器時代に始まり、中期青銅器時代、後期青銅器時代を経て、鉄器時代、ローマ時代へと居住が連続する典型的なテル型遺跡であり、下ガリラヤ地方の中心的な都市遺跡とされている。長期的な文化の変遷を同遺跡の発掘調査を通して明らかにすることで、これまで研究が進んでいない下ガリラヤ地方の都市の形成と発達の過程について、考古学的な観点から解明することを本研究の第一の目的とした。他地域との文化的交流や宗教的遺構や遺物の変化などの考古学的諸課題を追求することも課題とした。

本研究では、長期的な継続調査を視野に入れながら、テルの頂部および斜面などの複数の地区に調査区を設定することで、前期青銅器時代から鉄器時代に至る異なる時期の調査を同時に行うことができるため、下記のように具体的な課題を設定し、その解明を目標にして調査研究にあたった。

(2) 前期青銅器時代における都市形成の追求

前期青銅器時代は、地中海東岸地域において都市の形成が本格的に開始される時期である。テル・レヘシュからは前期青銅器時代の土器が多数採集され、2006年に開始した発掘調査においても、複数の調査区で前期青銅器時代の文化層に到達している。発掘調査を通して、テル・レヘシュにおける前期青銅器時代の居住の様相を明らかにし、当該地域における都市の形成の実態に迫ることを課題のひとつとした。

(3) 中期青銅器時代から後期青銅器時代における都市の実像と文化交流の解明

当該地域がエジプトの強い文化的影響を受けた後期青銅器時代は、この地域の各都市国家がエジプトの強い影響下に入ると同時に、エーゲ海地域やキプロスなど地中海の各方面との文化的交流が進展した時期でもある。下ガリラヤ地方もエジプトのファラオによる遠征がたびたび行われ、事実、テル・レ

ヘシュからはエジプトの土器や碑文資料が過去に採集されている。発掘調査の出土資料の分析を通して周辺地域との文化的な関係の追求をおこないたい。

(4) 鉄器時代の都市構造と建築遺構の解明

テルの頂部に集中すると想定される鉄器時代の遺構については、一定の面的な調査をおこない、城門など、都市構造の概要を解明することを目標にした。鉄器時代に関しては、ミニチュアの神殿（現在、イスラエル国立博物館に展示中）が採集資料に含まれていることから、神殿など、宗教的な遺構・遺物の発見もめざしたい。

3. 研究の方法

(1) テル・レヘシュの発掘調査と調査区

発掘調査の対象となるテル・レヘシュは、卵形をしたテル型遺跡であり、南北の長軸は約350mを測る。発掘調査では、テルの頂部と南側斜面について、ケニヨン・ウィラー・システムに従って、異なる複数の地点に調査区を設けて、テルがどのようにして形成されたかを探る。また、城門が想定されるテル頂部の北側地区にも調査区を設ける。

(2) 出土資料の調査と保管

調査の基地となるのは、遺跡近くのキブツ・エン・ドールであり、宿舎や作業場所、食事などについて全面的な協力が得られている。出土資料の図面作成や写真撮影などの作業は、考古局から交付されるライセンスの要領によって、すべてイスラエル国内でおこなうことになっており、キブツ内において、発掘調査と並行して進める。出土資料や発掘機材については、キブツ内の倉庫に保管する。

(3) 発掘調査の進め方

発掘調査は早朝からスタートし、現地で朝食を取ったあと、昼の12時まで行き、基地(キブツ)に戻って昼食を取る。午後は午睡のあと、夕方、再び、出土遺物の水洗、選別、登録、実測、写真撮影などの作業を手分けして行う。出土資料は国外に持ち出せないため、滞在中にこれらの処理をすべておこない、図面や写真・日誌などの記録を日本に持ち帰る。動植物遺体などについては、現地の専門家(テル・アヴィブ大学)に分析を依頼する。

(4) 調査後の研究と報告

帰国後は、発掘調査の予備的な報告を作成し、調査区や出土した遺構・遺物の図面や写真を添えて、年次報告をイスラエル考古局に提出する。また、出土遺構や遺物などの資料については、各研究分担者が役割分担に応じて、類例資料を調査し、関連論文などに当たりながら、資料の意義や位置づけについて

研究を深めてゆく。

4. 研究成果

2008～2011年度にかけて、テル・レヘシュの発掘調査を3次にわたって遂行し、下記のような成果を得ることができた。

(1) 前期青銅器時代

斜面東地区の下層で明確な建築遺構の一部が確認され、テル・レヘシュの居住の開始の様相が明らかになった。

(2) 中期青銅器時代

斜面西地区において、城壁遺構の年代が中期青銅器時代であることが確認され、地域の拠点的な都市としてテル・レヘシュが発達を開始したことが明確になった。また、アクロポリス東北隅で確認された大型建築（城門遺構）も年代確定が難しいが、構造的特徴からこの時代の築造である可能性が推定される。

(3) 後期青銅器時代

テルの下段テラスの調査区で、この時期の層位が累々と認められ、また、斜面東地区において大型建築遺構を確認した。

(4) 後期青銅器時代末～鉄器時代 I 期

近年調査が進んでいるメギド遺跡と同様に、青銅器時代の文化や居住の様相が鉄器時代初頭（鉄器時代 I 期）まで継続していることが明確になった。発掘調査で主要な成果が得られた時期であり、複数の地区で出土した円形石組のオリーブ搾油施設、テルの下段テラス地区で出土した祭儀関連遺構・遺物は、たいへん興味深い資料として特筆される。

(5) 鉄器時代 II 期～ペルシャ時代

アクロポリスに築かれた大型建築（要塞）の構造が部分的に解明することができ、この時期には地域の戦略的拠点としての性格を有していたことが明らかになった。

(6) ローマ時代

ヘレニズム時代には明確な居住がなく、ローマ時代には、アクロポリスに、家屋が複合的に並ぶ「ファームハウス」が築造されていることが確認された。その一部の発掘調査では、階段をもつ複層の建築遺構に伴って、コインや色彩壁画の断片などが出土した。

以上のように、テル・レヘシュ遺跡の発掘調査成果によって、この遺跡に残された居住史の様々な局面が明らかになった。その中で注目すべき点のひとつは、後期青銅器時代末から鉄器時代 I 期にかけての明確な物質文化の継続性である。この時期の地中海東岸地域は、同地域を支配していたエジプトの撤退、

「海の民」の入植、初期イスラエルの出現などによる混沌の時代として特徴づけられる。後期青銅器時代に勢力を誇っていたハツォールやラキシユといったカナン人都市が崩壊した一方で、現在のイスラエル北部の低地では、カナン系の物質文化を持つ都市が復興（または存続）し、繁栄していたことが注目を浴びてきた。テル・レヘシュでは、建造物、土器、オリーブ油生産など、複数の要素が後期青銅器時代から鉄器時代 I 期への継続性を示しており、このような発掘成果は、後期青銅器時代のカナン人都市が、鉄器時代初頭の混乱期を迎え、どのように繁栄を取り戻し、どのように終焉を迎えたのか、というテーマを考察するための重要な資料を提供してくれたと言える。テル・レヘシュは鉄器時代 I 期に最盛期を迎えるが、その基礎は後期青銅器時代にあったといえよう。また、鉄器時代 II 期の要塞、ローマ時代の居住址についての調査結果も当該地域における都市の形成と展開における局面のひとつとして、今後の研究に貢献するに違いない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- ① Tsukimoto, A., Kuwabara, H., Paz, Y. and Hasegawa, S. Tel Rekhesh 2009: Preliminary Report. Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel 23, 2011、査読無
http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.asp?id=1678&mag_id=118
- ② 桑原久男・月本昭男、3,000 年の居住史を探る－イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2010 年（第 6 次）発掘調査一、平成 21 年度考古学が語る古代オリエント：第 18 回西アジア発掘報告会報告集、第 18 集、100-104 頁、2011 年、査読無
- ③ 月本明男・小野塚拓造・桑原久男、イスラエル、テル・レヘシュ遺跡 2009 年（第 5 次）発掘調査一青銅器時代から鉄器時代への移行期を探る一、平成 21 年度考古学が語る古代オリエント：第 17 回西アジア発掘報告会報告集、第 17 集、95-100 頁、2010 年、査読無
- ④ Yitzhak Paz, Tatsumi Yoshinobu et al, Excavations at Tel Rekhesh, Israel Exploration Journal, vol. 60-1, 22-40 頁、2010 年、査読有
- ⑤ 巽善信、イスラエル、テル・レヘシュ遺

跡第5次調査、天理参考館報、第23号、
93-100頁、2010年、査読無

- ⑥ Paz, Y. Okita, M., Tsukimoto, A., Hasegawa, S., Lim, S.-G., Sugimoto, D.T., Onozuka, T., Tatsumi, Y., and Yamafuji, M. Excavations at Tel Rekhes. Israel Exploration Journal 2010-1、22-40頁、査読有
- ⑦ 巽善信、イスラエル、テル・レヘシユ第3・4次発掘調査、天理大学附属天理参考館報、第22号、41-50頁、2009年、査読無

[学会発表] (計2件)

- ① Kuwabara, H. An aspect of urbanization in the ancient Galilee -The results of Tel Rekhes Project-, International Congress 'Perspectives from the Periphery Galilee in the Cultural Changes through Ages' 2011年5月17日、立教大学
- ② 山内紀嗣、オリーブの町-テル・レヘシユ遺跡、日本西アジア考古学会公開セミナー、2009年4月11日、天理大学附属天理参考館

[その他]

ホームページ等

<http://rekhes.com/rekhes.com/Home.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 久男 (KUWABARA HISAO)
天理大学・文学部・教授
研究者番号：00234633

(2) 研究分担者

山内 紀嗣 (YAMAUCHI NORITSUGU)
天理大学・附属天理参考館・嘱託
研究者番号：80441426
日野 宏 (HINO HIROSHI)
天理大学・附属天理参考館・学芸員
研究者番号：20421290
巽 善信 (TATSUMI YOSHINOBU)
天理大学・附属天理参考館・学芸員
研究者番号：60441432
飯降 美子 (IBURI YOSHIKO)
天理大学・附属天理参考館・学芸員
研究者番号：30441439
橋本 英将 (HASHIMOTO HIDEMASA)
元興寺文化財研究所・研究部・研究員
研究者番号：80372168